徳島新聞　平成27年３月27日

時評とくしま

科学無縁の暗夜行路へ

道徳教育の曲がり角

山崎　勝之
鳴門教育大学院教授

道徳が教科になる。大津市の中2いじめ自殺に端を発する施策だが、あるネット調査では教科化に反対する声は77％にも及ぶという。

2月から1カ月間パブリックコメントを求め、道徳の教科化に伴う学習指導要領の一部改正案が公表された。見ると、相変わらず目標（価値）は拡散し、伝統・文化や他国の尊重など多様な目標がひな壇に並び飾られた様相だ。目標の拡散は教育全体の整合性を崩し、その効果をそぐ。

また内容項目に至っては、小学校ではまたぞろ40弱も挙がっている。その導出には科学的根拠（エビデンス）はなく、各項目下に設定される学年ごとの具体的な目標や学年間の差異にもエビデンスはない。さらに言えば、これほど多くの目標が並列的な関係にあることなど考えられない。どうやら改正案の作成者は、道徳行動をもたらす根幹の特性が集約される科学的知見をご存じないようだ。

アメリカでは道徳教育の旗手は人格教育であろう。その中心的役割を担う一人にリコーナ博士がいる。彼とは旧知の仲で来県してもらったこともある。博士が展開する人格教育では、目標の設定は極めて科学的で、エビデンスが付く。旧態依然とした日本の道徳教育は見習うべきだ。

そもそも道徳性は、実態のない抽象性の高い概念（構成概念と言う）である。その育成は困難を極める。昨年配布された「わたしたちの道徳」のような書籍では到底太刀打ちできない。ロールプレイやスキル訓練など新規な方法を導入する意見もあるが、その的を射た適用は難しい。

このことは評価にも通じる。構成概念の評価に心理学はどれほど悩まされてきたことか。数値では評価しないということは担任教師の記述やチェック評価になろうが、そこには教師個人の人格が反映され、客観性にはほど遠い。道徳は教科になじまないと言われるゆえんである。

教科化反対の声は新鮮味がない。賛成派の専門家が挙げる利点も、道徳教育の中身を棚上げし失笑を禁じ得ない。中身が伴わなければ、それらは軒並み欠点となる。教科として重要度を上げるのは賛成だが、「特別の教科」と言う以上、教科書でも評価でもさらに特別の扱いが必要になる。

徳島県の高齢化率は全国平均を上回る。親が亡くなり、生前の親不幸を悔い慟哭する姿の憐れ。生前に親へ添う行為をなすことこそ、道徳の目標たる人倫ではないのか。孝経の一節「身体髪膚、之を父母に受く」が身に染みる。情動・感情、認知・思考、そして行動の連動に関する最新の科学知見を取り入れよ。

高齢化社会にどっぷり漬かるこの国の行く末を、新生の道徳教育が担えるはずはない。

※本ファイルの著作権は徳島新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は固くお断りいたします。